

4章 海域2の調査結果

4-1. Fiji Fracture Zone の概要

Fiji Fracture Zone (FFZ)の構造概略図を図4-1-1に示す。

FFZ は北フィジー海盆の中央部よりフィジー諸島北方を通りトンガ海溝に延びる断続した凹地や海嶺からなり、Fiji Transform Fault (FTF) を含む。FFZ に沿って浅発地震が多く観測され (Louat and Pelletier, 1989)、活動的な断層でインド=オーストラリアプレートと太平洋プレートの境界を成すと考えられている (Hughes-Clarke et al., 1993 など)。

FFZ の構造は地形的にあまり鮮明ではない地域もあるが、三重点から東方へ延び、Viwa Rift 及び Fiji Platform の北側を通って Lau Basin の北側の境界をなし、Tonga 海溝に至る東西の延長は 1,000~1,200km の構造帯である。175° E から 179° E 間は地形的に構造が鮮明に現れていて、Yasawa Trough、Yadua Trough などの凹地や海嶺状の地形的高まりが見られるが、175° E 以西や 179° E 以東は構造が不鮮明である。

FFZ に沿って発生した浅発地震の解析の結果、三重点から Fiji Platform の北方の間は左横ずれ断層と考えられている。(Hunmburger, 1987; Louat and Pelletier, 1989)。さらにこの左横ずれ運動に伴い、177° 30' E の Yasawa Trough と Yadua Trough の間や 178° 30' E 付近に見られる拡大軸を伴うプルーアパート構造 (Extensional Relay Zone) が形成されていて ERZ A 及び ERZ B と呼ばれている (Fox and Gallo, 1984, Johnson and Sinto, 1990)。

Fiji Platform 北方では、FFZ を隔ててその北側に Balmoral、Braemer、Bligh 等の海嶺が FFZ にほぼ平行ないしは斜交して配列するがこれらの海嶺は本来 Fiji Platform の一部であったものが、ERZ B の拡大軸の移動に伴い Fiji Platform から分離したと考えられている (Jarvis et al, 1994)。

4-2. 海域2の海底地形と SBP

(1) 海底地形

図4-2-1、図4-2-2、図4-2-3に、それぞれ、調査海域の海底地形図、地形3次元表現図及び陰影図を示す。

本地域は Yasawa、Yadua などのトラフおよび海嶺状の地形的高まりからなる東西方向の顕著な地形を示し、それに付随して Biwa Rift および ERZ A からなる南北性の谷地形が見られる。

Triple Junction から 176° の Viwa Rift までの間における FFZ の構造はあまり鮮明ではない。Triple Junction から幅 30km におよぶグラーベンが約 70km 北東方向に延び、174° 30' E 地点で地形的に不鮮明となる。この地点からグラーベンの方向に直交する南東方向に急傾斜の崖が延び 175° 00' E 付近でこの急崖は NE-SW 方向の海嶺により遮断される。

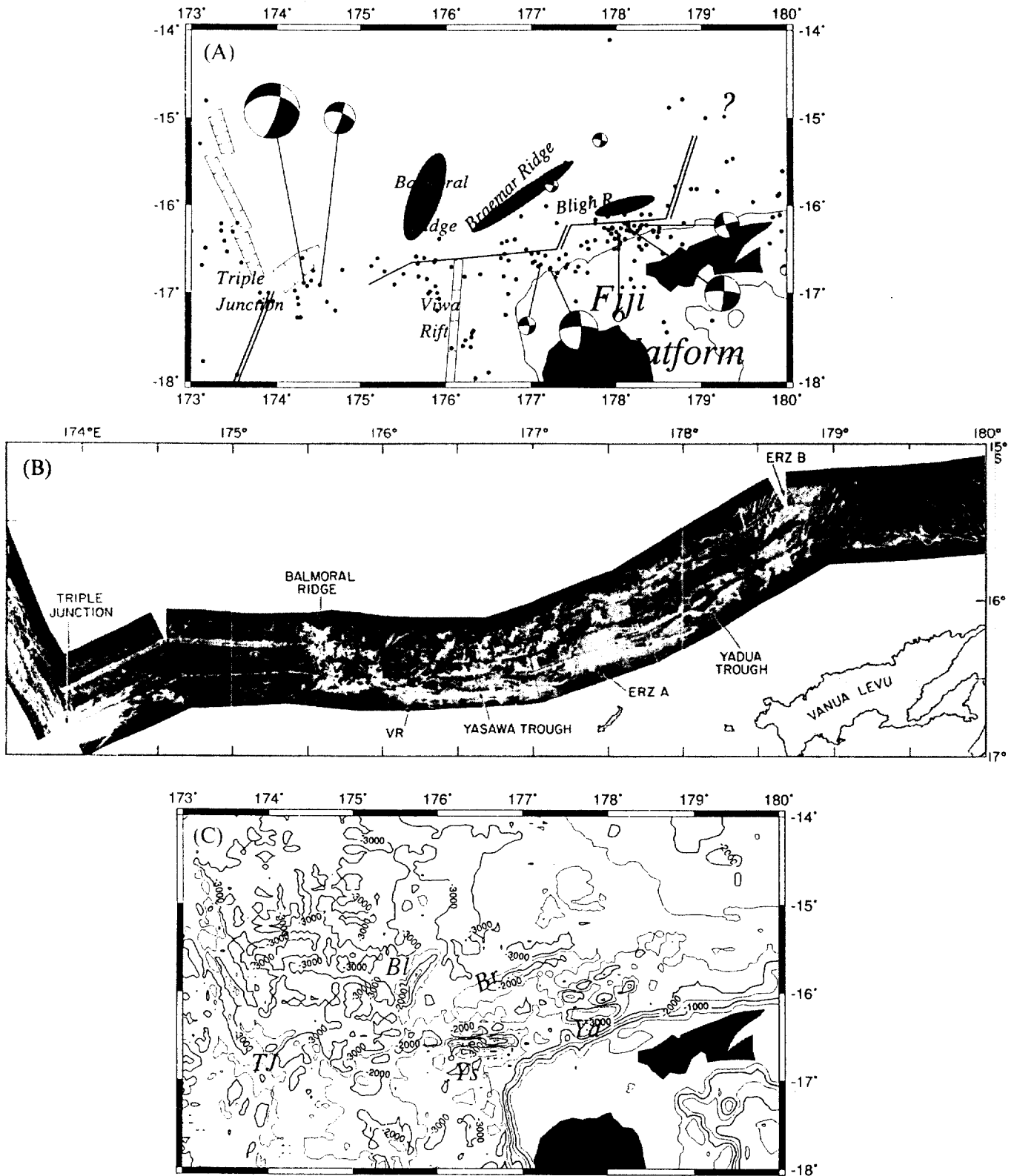


Fig. 2. (A) Physiographic and tectonic features within and adjacent to the Fiji Transform Fault. The fault trace is offset in places and the thick solid line shows its probable trace. Extensional areas accompanied by volcanism are shown as double thin lines and extensional areas with little or no volcanism are shown as hachured lines. Earthquake epicenters are shallower than 10 km. Focal mechanism solutions are Harvard CMT solutions and 1 published solution from Hamburger et al. (1990). (B) GLORIA imagery of the western FTF shows the active ERZ's adjacent to Fiji. Between the Balmoral Ridge and the triple junction, there are few lineaments indicating that the active FTF lies south of the imaged area. (C) Bathymetry of the FTF shows extreme relief. Several large bathymetric highs occur north of the fault trace.

図 4-1-1 Fiji Fracture Zone (FFZ) の地形構造

Jarvis et al., (1993)

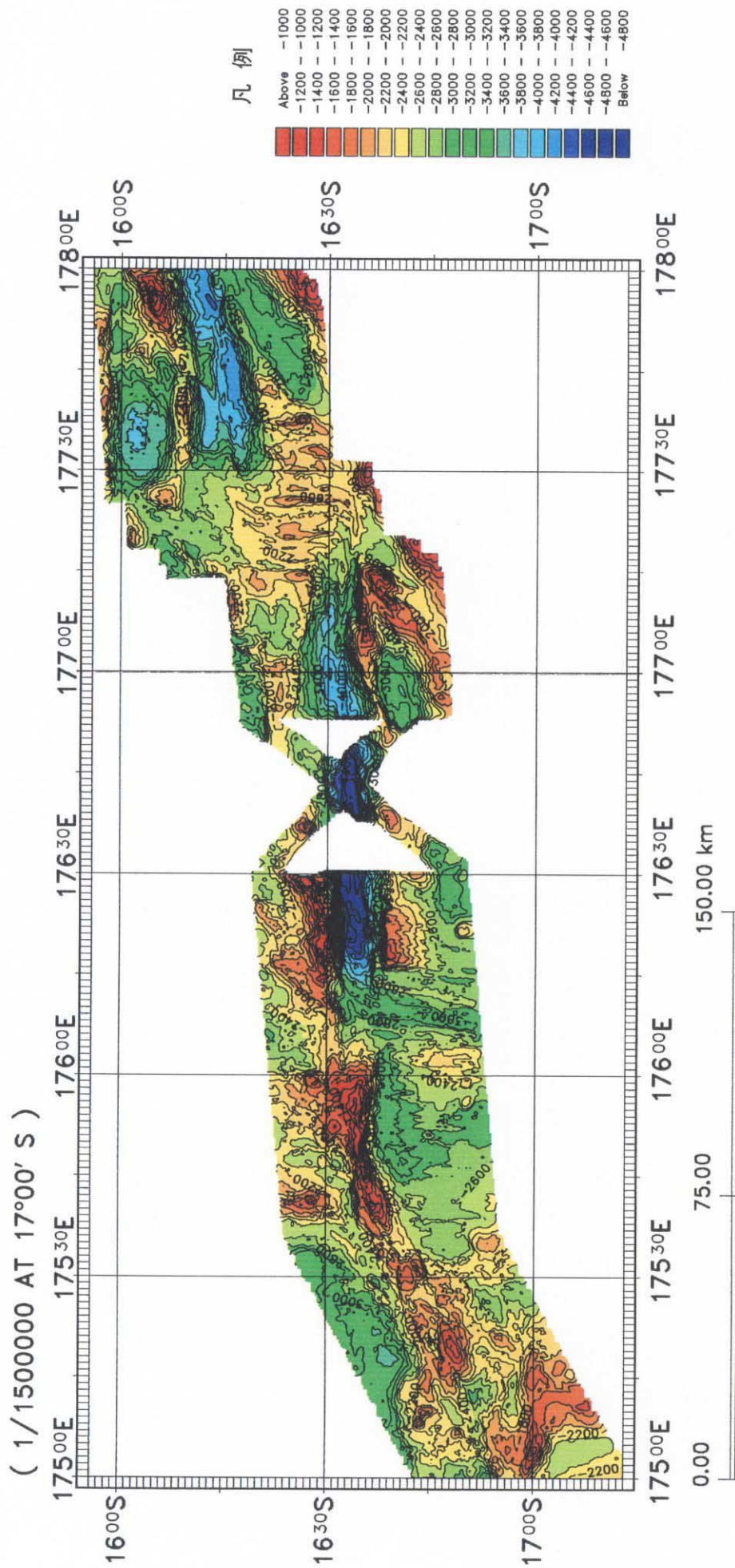


図 4-2-1 海域 2 の海底地形

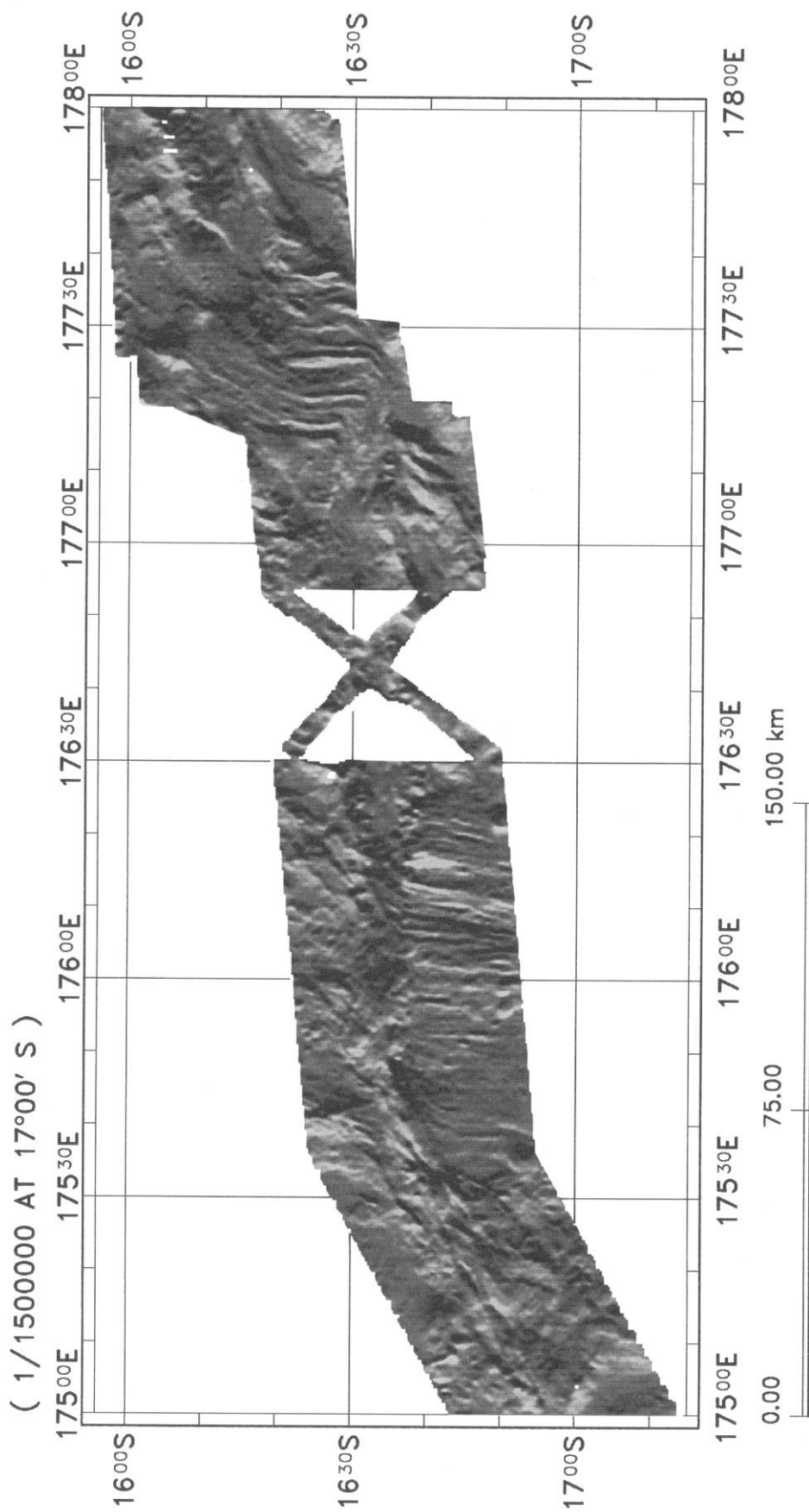


図 4-2-2 海域 2 の地形陰影図

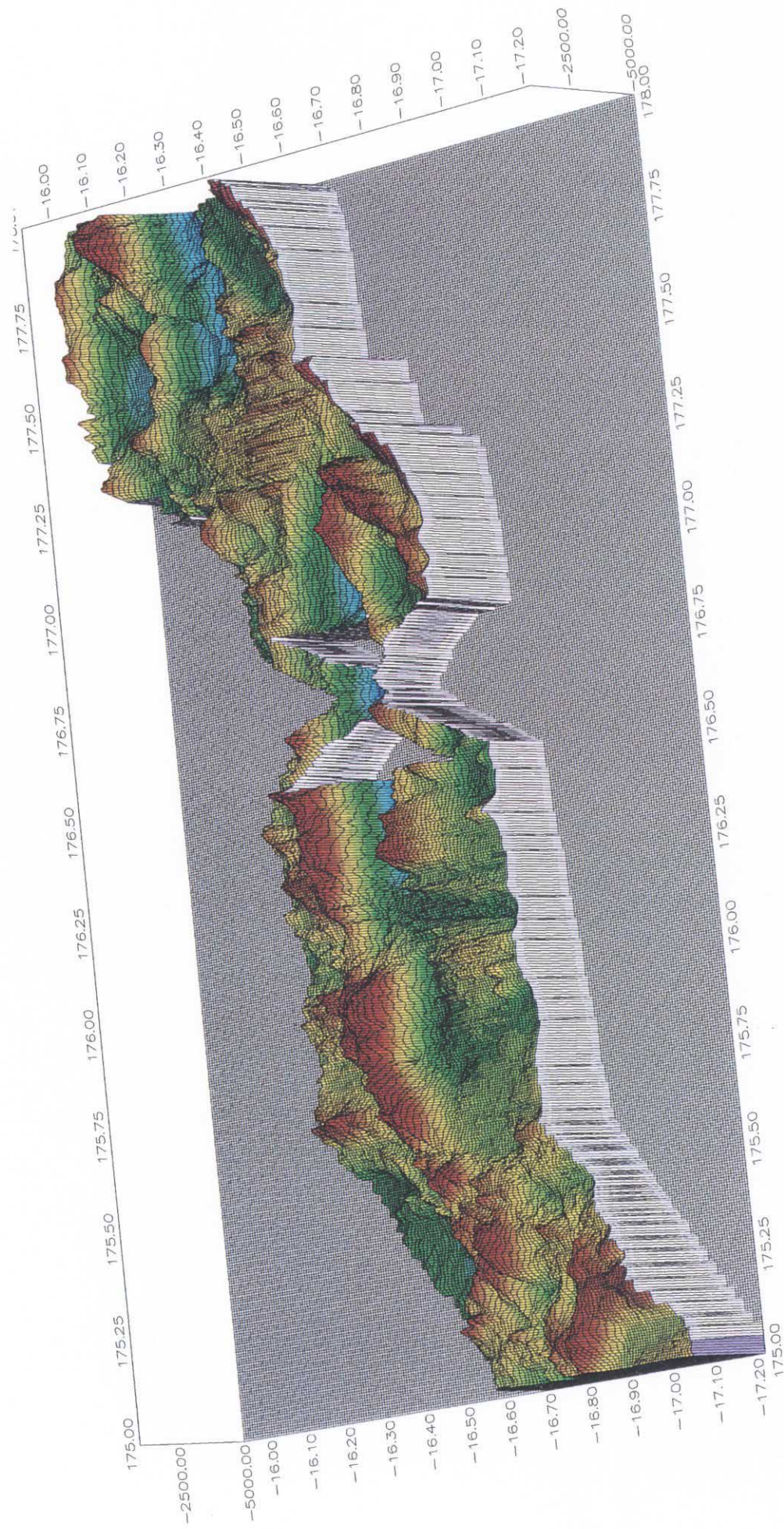


図4-2-3 海域2の海底地形3次元表現図

本地形調査はこの NE-SW 方向の海嶺群の西端より東方域で行った。

175° E~175° 40' E 間には水深 1,000m 以浅に達するの断続的な尾根状地が SW-NE 方向に延びて高まりを形成する。175° 40' 付近より東に向かってこの尾根状地形は次第に方向を変化し、やがて E-W 方向となる。この屈曲地点の北方では **Balmoral Ridge** が NNE-SSW 方向に延びる。全体的に尾根状地形に平行ないし、やや斜交したリニアメントが多く見られる。175° 20' 以東では稜線に起伏が多いものの尾根は比較的直線的である。

175° 40' E 付近から 177° 15' E の間では東西方向の海嶺及び **Yasawa Trough** とそれに沿う南北両側の尾根状地形によって構成される東西方向を軸とする明瞭な地形をなす。**Yasawa Trough** では北側の尾根状地最浅部の 140m から **Yasawa Trough** 最深部の 4500m まで 4000m を超える比高差が在り、**Yasawa Trough** の輪郭を成す斜面は直線的である。

176° 10' E 付近でそれより西方に連続する海嶺は谷地形によって切られる。この谷地形はこの地点より南方へ続く比深 700m 程度の谷地形で、**Viwa Rift** と呼ばれている。**Viwa Rift** は拈軸と考えられていて (Chase, 1971)、その周辺では N-S 方向のリフト軸に沿った多数の地壘・地溝が見られる。

177° 30' E から地形調査範囲東端部の 178° E を越えて東西へ延びる顕著な舟状海盆とそれに平行する海嶺が認められる。舟状海盆の最深部は 4000m を越え、その南北両側にある海嶺との水深差 1500~2500m 程度を示す。この舟状海盆は **Yadua Trough** と呼ばれ、**Yasawa Trough** 同様 FFZ の最も顕著な構造要素を成す。東西方向に延びる **Yadua Trough** と **Yasawa Trough** は 176° 25' E で南北方向に約 25km ずれて繋がる。この両舟状海盆の間には水深 2500m 程度の緩やかな高まりが存在し、その高まり上に 177° 25' E を中心に南北方向の軸を持つ尾根状地形と谷地形が見られる。これは FFZ の左横すべり運動の結果形成されたブルーアパート構造と考えられ小規模な拈大軸が存在し、**Extensional Relay Zone (ERZ)** と呼ばれる (Johnson and Sinton, 1990)。尾根状地と谷の軸が、その北端と南端において東西方向に緩やかに変化することより、全体としては S 字形を呈する。

Yadua Trough の北側には、**Yadua Trough** と **Central Trough** にはさまれて **Yadua Ridge** が東西方向に延び、この海嶺は **Fiji Platform** の断片である考えられている (Jarvis et al., 1994)。

(2) SBP 調査

この地域の地形は凹凸が激しく、急峻であるため、SBP 記録は良くないが、記録が得られている部分で、堆積物被覆部を記した。

タイプ例としては図 4-2-4 に示す 3 種類に分けた。各タイプは以下の通りである。

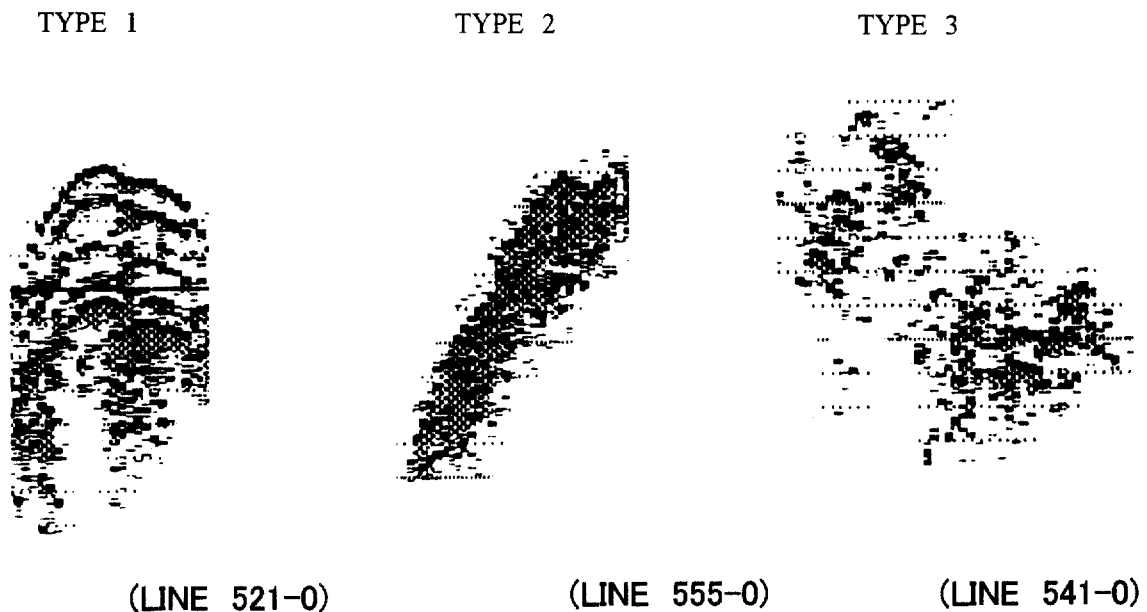


図 4-2-4 SBP 記録タイプ別分類例

タイプ 1 : 透明層 (未固結堆積物) と不透明層 (固結堆積物) の互層が見られるタイプ。
タイプ 2 : 均一不透明層が見られるタイプ。下の基盤岩との境界は比較的明瞭である。
タイプ 3 : 無方向性の粒状の不透明部で示されるタイプ。斜面であり、機器の特性上このような記録になっているとも言える。

タイプ分布図から、調査域のほとんどはタイプ 3 の状態で堆積している。次いでタイプ 2 が約 20% 見られる。タイプ 1 は盆地状地形部に極くわずか見られるだけである。図の空白部分は地形が急峻な所で SBP 記録も明瞭でなく、堆積物はないかタイプ 3 と同様と考えられる。

西地域のタイプ別分布を図 4-2-5 に示す。

地域北西部すなわち $175^{\circ} 11' E \sim 175^{\circ} 33' E$ の北端部の海盆地、地域中央部 $175^{\circ} 35' E \sim 176^{\circ} 01' E$ の南半部の海盆地、また地域南西端の盆地状地形の比較的平坦部ではタイプ 1, 2, および 3 のタイプの堆積層が見られ、厚い所では 20~40m 堆積している。タイプ 1 は海盆地内でも、特に平坦部で見られるのみである。この地域以外はほとんどタイプ 3、または 2 である。

西地域の中でも特に、 $175^{\circ} 40' E, 16^{\circ} 37' S$ から東方の $176^{\circ} 00' E, 16^{\circ} 35' S$ へと続く海嶺、又 $176^{\circ} 10' E, 16^{\circ} 30' S$ から東方の $176^{\circ} 30' E, 16^{\circ} 27' S$ へと続く海嶺

の南側は急崖となって落ち込み、その部分は図の中で堆積層のないと考えられる空白部分となっている。

東地域のタイプ別分布を図 4-2-6 に示す。

この地域でも地域南西部の海嶺部からその南急斜面にかけて、また東半部の海嶺部からその急斜面にかけては、図の中で堆積層が見られない空白部となっている。一方、地域中央部の N-S Valley、南西部の Yasawa Trough 及び北東部の Ya n dua Trough の比較的平坦部では 20~30m のタイプ 3、あるいは、所によりタイプ 2 の堆積層が見られる。タイプ 1 は地域東部 177° 54′ E の南端部にわずかに見られるだけである。

(3) M B E S 音圧イメージ

海域 2 の音圧イメージを図 4-2-7 に示す。

調査海域南西端の浅所と、Transform fault に沿うリッジおよび N-S Ridge を中心とする海域で音響レベルが高く露岩あるいは未固結堆積物の発達が少ないと思われる。また、地形的には浅所ではないが、南北に多数の地塁・地溝が見られる Viwa Rift も音響レベルが極めて高い。

なお、海域北東端の Central Hill、東部の盆状地およびその南部の溝状地では比較的音響レベルが高く、地形的には深所であるが未固結堆積物の発達が少ないと思われる。以下に海域毎にその特徴を述べる。

・ 175° E~176° 30′ E

大局的には台状地、尾根状地等の浅所で音圧レベルが高く、溝状地、盆状地等の深所で低い。そのうち顕著なものとしては調査海域南西端の浅所と、175° 45′ まで続く NE 方向の Transform fault に沿うリッジ及びそこから EW 方向にトレンドを変えたリッジが高音圧域として挙げられる。ここでは露岩が広く分布すると推定される。また、2000m 以浅の地形的浅所でも比較的音圧が高く未固結堆積物の発達は少ないものと見られる。

176° 10′ E 付近の Yasawa Trough の西端 から S10° W 方向に延びる Viwa Rift 周辺では軸に沿った多数の地塁・地溝が見られる。そこでは前述のような地形的浅所ではないが、地塁に沿った高音圧部が認められる。

・ 176° 54′ E~178° 00′ E

当海域も大局的には台状地、尾根状地等の浅所で音圧レベルが高く、溝状地、盆状地等の深所で低い。高音圧域としては南西部の SW に延びる尾根状地、NS を中心とする海域、Central Hill とそこから略 W-E 方向に延びる尾根状地が顕著であり、未固結堆積物の発達が少ないと見られる。特に NS を中心とする海域では当海域で最も音圧レベルが高く、広く露岩していると推定できる。

なお、海域北東端の **Central Hill** 東部の盆状地およびその南部の **Yadua Trough** では比較的音響レベルが高く、地形的には深所であり、ここでは溶岩が覆っている可能性がある。また、逆に地形的浅所であるが音圧レベルが低く未固結堆積物の存在が推定される個所として、南東端の島棚とその北西に見られる SW-NE に延びる尾根状地が挙げられる。

4-3 磁気調査

4-3-1 全磁力

全磁力測定は、175°E~178°E の海域において、測線間隔 2nm の地形調査と並行して実施した。調査期間中、磁気嵐等の影響は特に認められなかった。全磁力等値線図は全磁力測定値を 500m でグリiddingし作成した。コンター間隔は 20nT とした。

当海域の全磁力値は 41,550~43,400nT の範囲にあり、大局的な傾向は南で高く北で低い。この傾向は理論的に求められたグローバルな地球磁場 (IGRF) の傾向と一致する。

4-3-2 磁気異常

磁気異常は各測線上の全磁力値と IGRF (国際標準地球磁場) との残差として求めた。得られた磁気異常は極率最小化法により格子変換を行なった。格子間隔を 500m とし、コンター間隔は 20nT とした。その磁気異常図を図 4-3-1 に示す。

一般に中緯度地方では磁性体を反映する磁気異常は負磁気異常と正磁気異常との対として表現される。ここで南半球の場合は負磁気異常と正磁気異常はそれぞれ磁性体の南側と北側に現れ、これを正帯磁、この正負が逆になるといわゆる逆帯磁であるとされる。

当海域では磁気異常図からでは逆帯磁となるパターンは見られず、ほとんどが正帯磁とみられるパターンを示す。大局的な傾向としては、調査海域全体に拡大軸およびトランスフォームに沿って正負の磁気異常が分布する。その中で特に顕著な正帯磁による磁気異常帯として

①海域西端部の SW-NE に軸を持つリッジ

②Viwa Rift 北端部

③Central Hill と N-S Ridge との間の平坦地

の3地域が挙げられる。そのうち②と③の海域では地形的には高所となっておらず、海底面下において高磁性岩体の存在が推定できる。

4-3-3 極磁気異常

南半球の中緯度地方では、正帯磁 (現在の地球磁場と同方向の磁化) した磁性体を反映する磁気異常は、一般に北の高異常と南の低異常の対によって表される。これに極磁気変換を施すことにより北の高異常が南側へ移動し、南の低異常が消滅した単一の高異常として再現される。

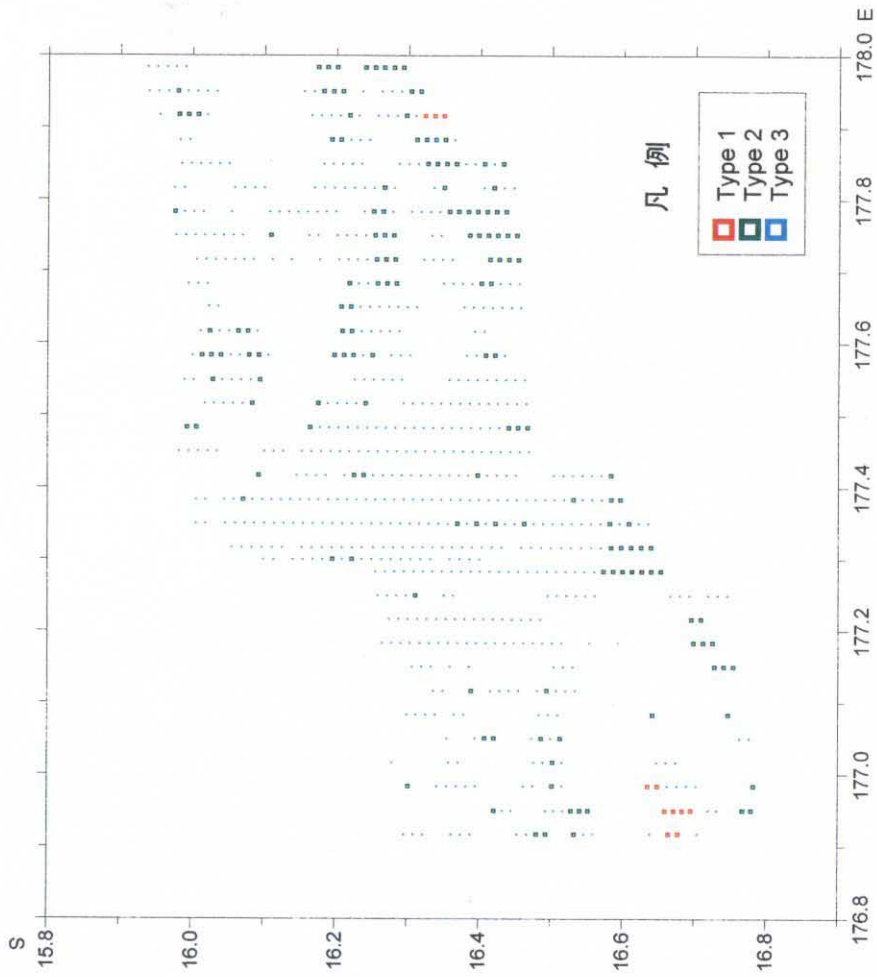


図4-2-6 SBP記録タイプ区分図(東地域)

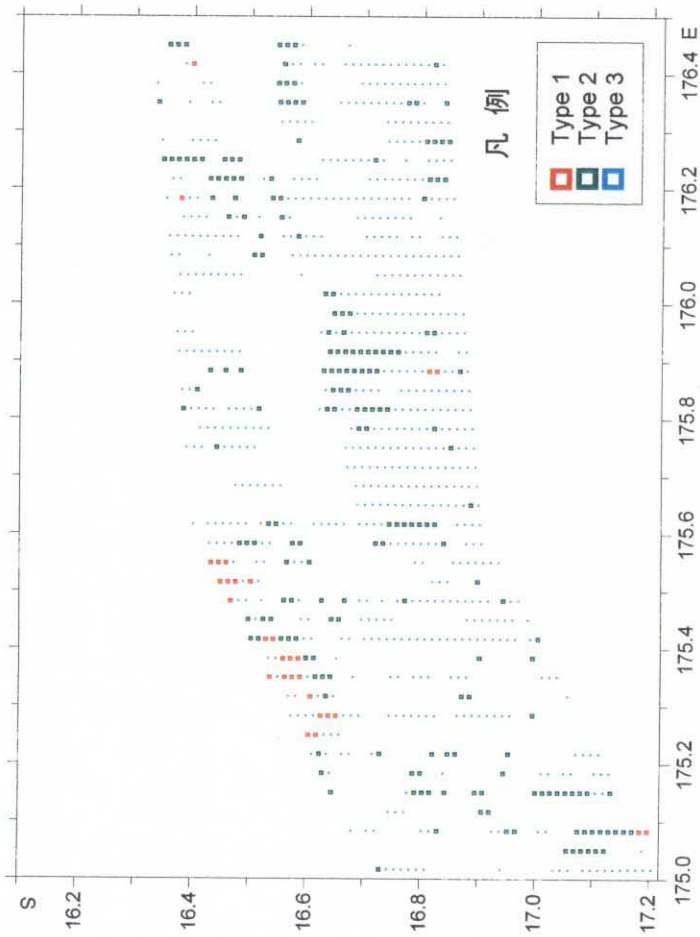


図4-2-5 SBP記録タイプ区分図(西地域)

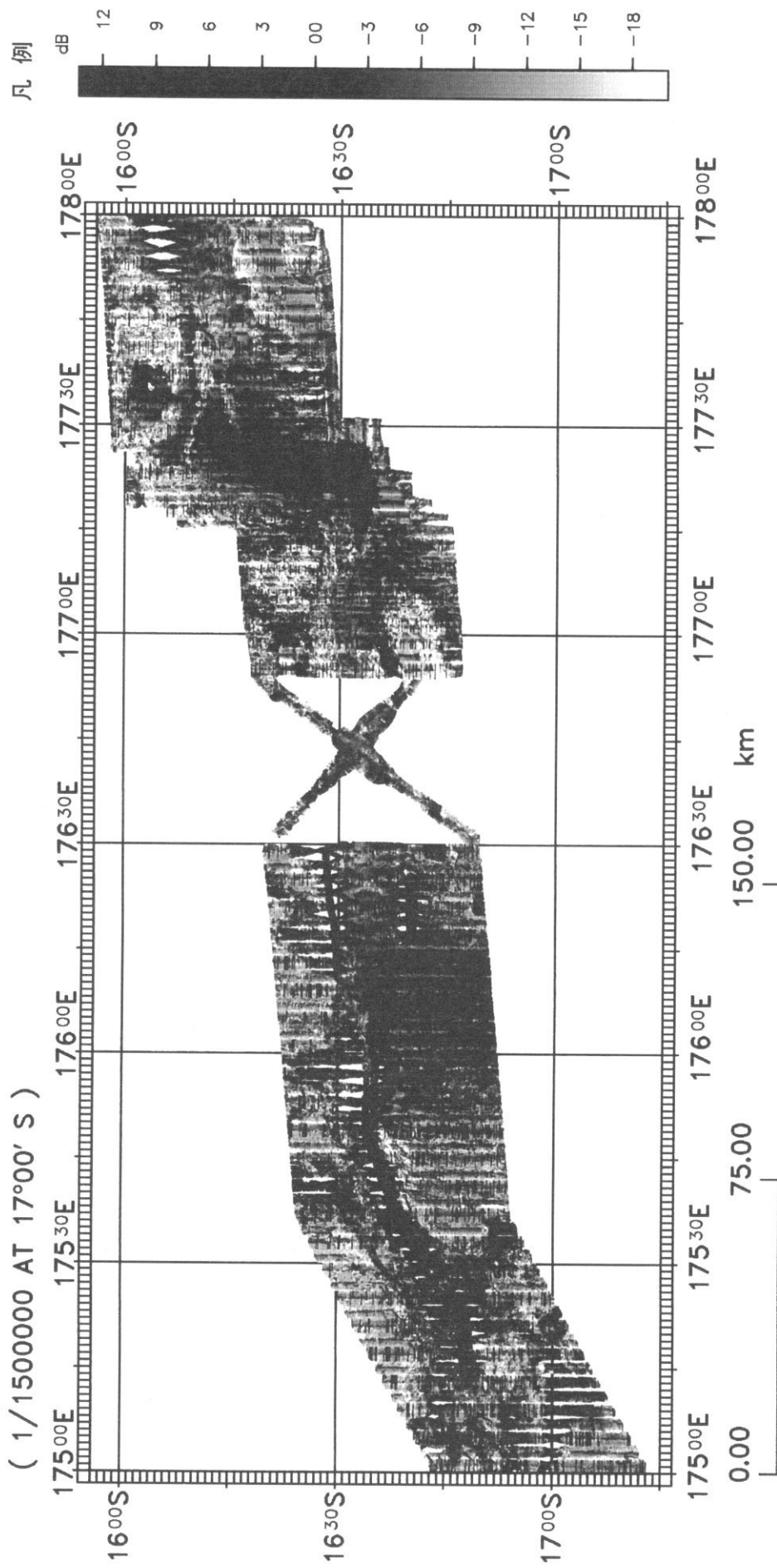


図 4-2-7 海域 2 の MBES 音圧イメージ

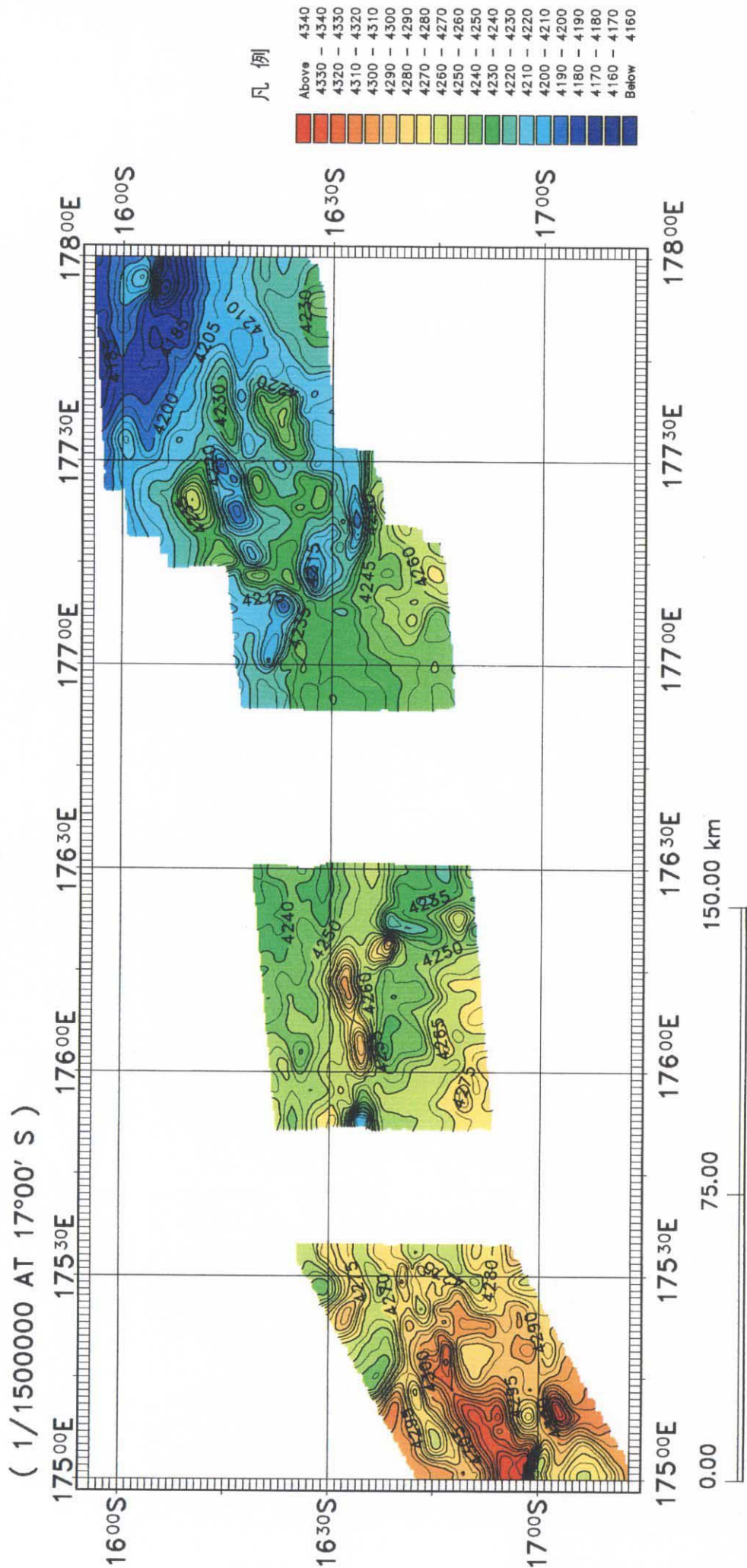


图 4-3-1 磁异常图

こうして得られる極磁気異常図は、正帯磁した磁性体の直上に高磁気異常が分布し、地形・地質との対比や磁性体の分布に対する解釈が容易になると同時に、3次元定量解析を利用した磁気構造の把握が可能となる。

調査地域の四隅の地点での地磁気の三要素を表 4-3-1 に示す。

表 4-3-1 調査地域の四隅の地点での地磁気の三要素

位置	南緯	東経	全磁力	伏角	偏角	X成分	Y成分	Z成分	水平成分
	(°)		(nT)	(°)		(nT)			
南西	17.2181	175.0	43,194	-38.84	12.38	32,862	7,216	-27,088	33,645
南東	17.2181	178.0	42,591	-37.95	12.51	32,785	7,275	-26,195	33,583
北東	15.9303	178.0	41,848	-35.84	12.23	33,156	7,187	-24,501	33,926
北西	15.9303	175.0	42,434	-36.75	12.11	33,243	7,135	-25,389	34,001
平均値			42,517	-37.35	12.31	33,012	7,203	-25,793	33,789

本解析では、以下の値を採用して極磁気変換を行なった。

全磁力 42,500 nT

伏角 37.5°S

偏角 12.3°W

IGRF 残差磁気異常図に対して施した極磁気変換の結果を図 4-3-2 の極磁気異常図に示す。極磁気異常図の磁気異常分布は IGRF 残差磁気異常図 (図 4-3-3) と比較して、次のような変化が認められる。

- ・磁気異常のコントラストが増大している。
- ・調査海域全体として、極磁気異常と海底地形との相関は不明瞭である。
- ・極磁気異常値は、-779 nT から 1112 nT の範囲にあり、海域全体として極磁気異常値の変化が大きい。
- ・正の磁気異常が南方に移動するとともに、正の磁気異常分布域が拡大し、負の磁気異常分布域が小さくなっている。また、正の磁気異常の異常値が増大している。

以下に当調査海域を東部、中部および西部の3海域に分けて、各海域の極磁気異常の分布の特徴を述べる。なお、図 4-3-4 の極磁気異常・磁化強度分布・海底地形図の総合図には、ridge、trough 等の名称を示すとともに、各海域ごとに極磁気異常、磁化強度異常と海底地形との関係を把握するために異常に番号を付している。

・ 東部海域

3 海域中、最も極磁気異常値の変化が小さい海域である。その中で南北方向の極磁気異常の配列が卓越している。IGRF 残差磁気異常図では、東西方向の磁気異常の配列が優勢であったが、極磁気異常図では東西方向の異常は極めて弱くなっている。

東部海域の中央付近と北東端が正の極磁気異常分布域であり、他は負の極磁気異常分布を示している。当海域の東側と西側では、海底地形は東西方向の ridge、trough が卓越しているが、極磁気異常図では極磁気異常の変化の乏しい海域であり、極磁気異常の配列には方向性が認められない。

中央付近の正極磁気異常 (E05、E06、E07) は主に南北方向が卓越しており、これらの正の異常は Central Hill 南方及び NS Ridge の地形高所に対応している。

中央北端の比較的弱い正の極磁気異常 (E02) は Central Trough の西端の地形凹部に位置している。また、この極磁気異常群の東端には、Yadua Trough 内の小規模な東西系の地形高所に対応した東西系の正極磁気異常 (E03) が分布している。

北東端の正の極磁気異常 (E01) は Yadua Ridge の東端の地形高所と一致している。Yadua Ridge は西方に延びているが、極磁気異常の延長方向は異なり、北西方向へ延びる傾向が認められる。

・ 中部海域

極磁気異常は 3 海域の中でほぼ中間の変化を示している。

IGRF 残差磁気異常図で卓越する東西方向の磁気異常は極磁気異常図でも見られるが、極磁気異常図では南北方向が卓越している。

Yasawa Trough の南側の Viwa Rift には正の極磁気異常 (C03) が分布し、南方 (C09) と東方 (C12、C13) に延びる傾向が見られる。

Yasawa Trough 西端の地形凹地には正の極磁気異常 (C01、C02) がほぼ東西に配列し、西方に延びている。また、この異常は南方の Viwa Rift の極磁気異常 (C03) に連続する傾向が認められる。

当海域では、Viwa Rift (C03) 及び西端の正の極磁気異常 (C05) を除き、地形との相関は認められない。

・ 西部海域

3 海域中極磁気異常の変化が最も大きい海域である。

当海域では、IGRF 残差磁気異常図で卓越する北東-南西方向の極磁気異常の配列が優勢であり (W01、W02、W04、W06、W11、W13)、極磁気異常図では、さらに、この方

凡例
Pole-Reduction Anomaly
(nT)

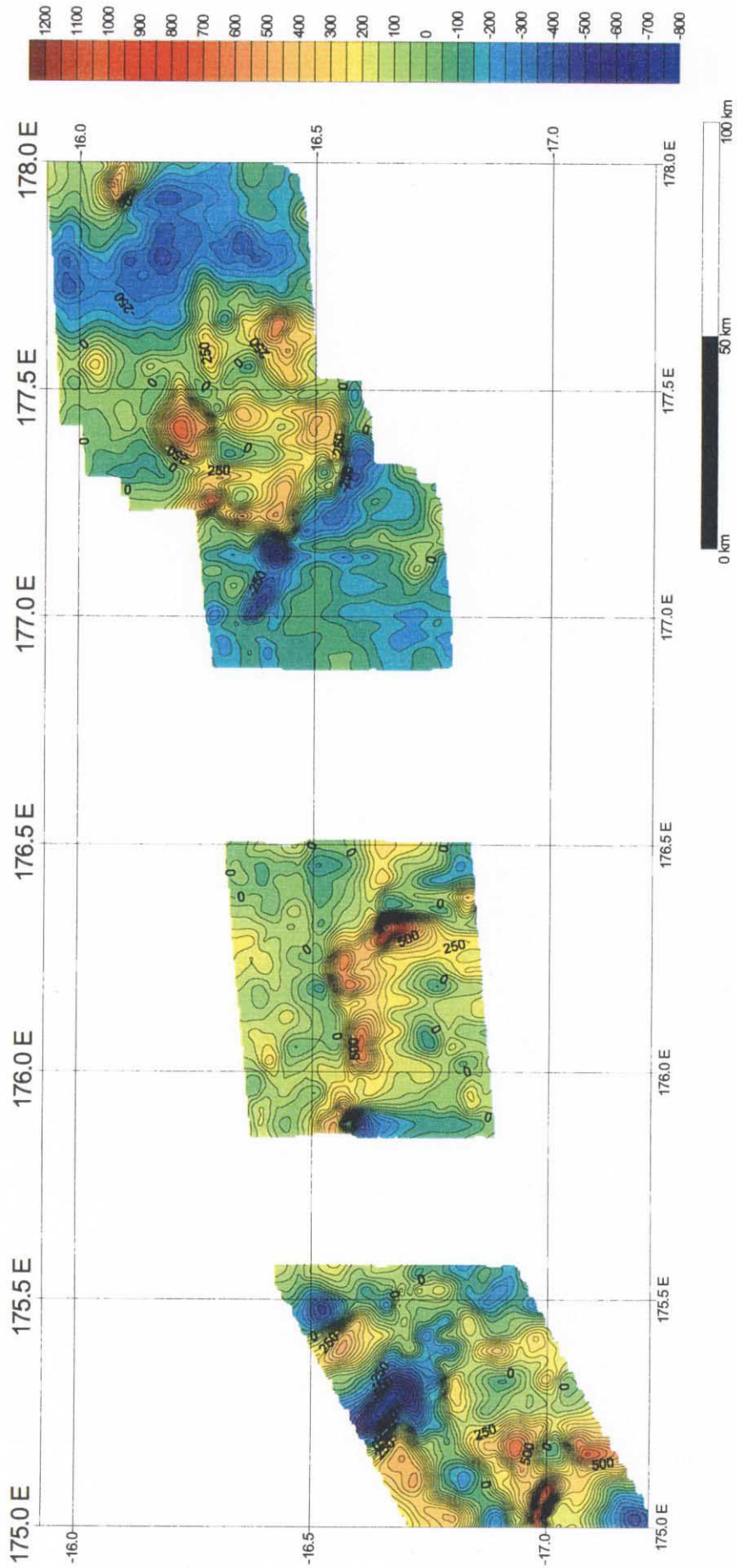


图 4—3—2 極磁氣異常図

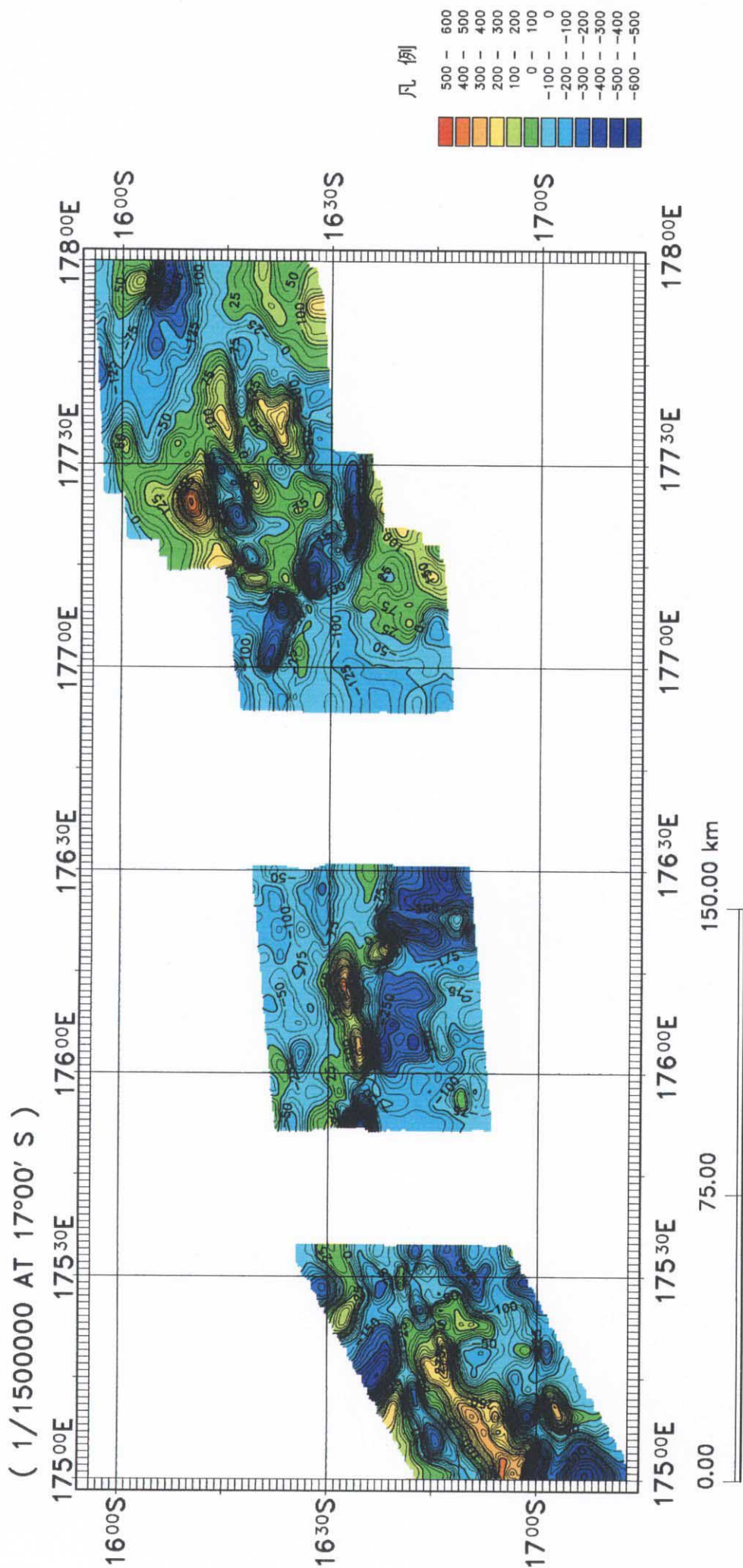


图 4-3-3 IGRF 残磁异常图

凡例

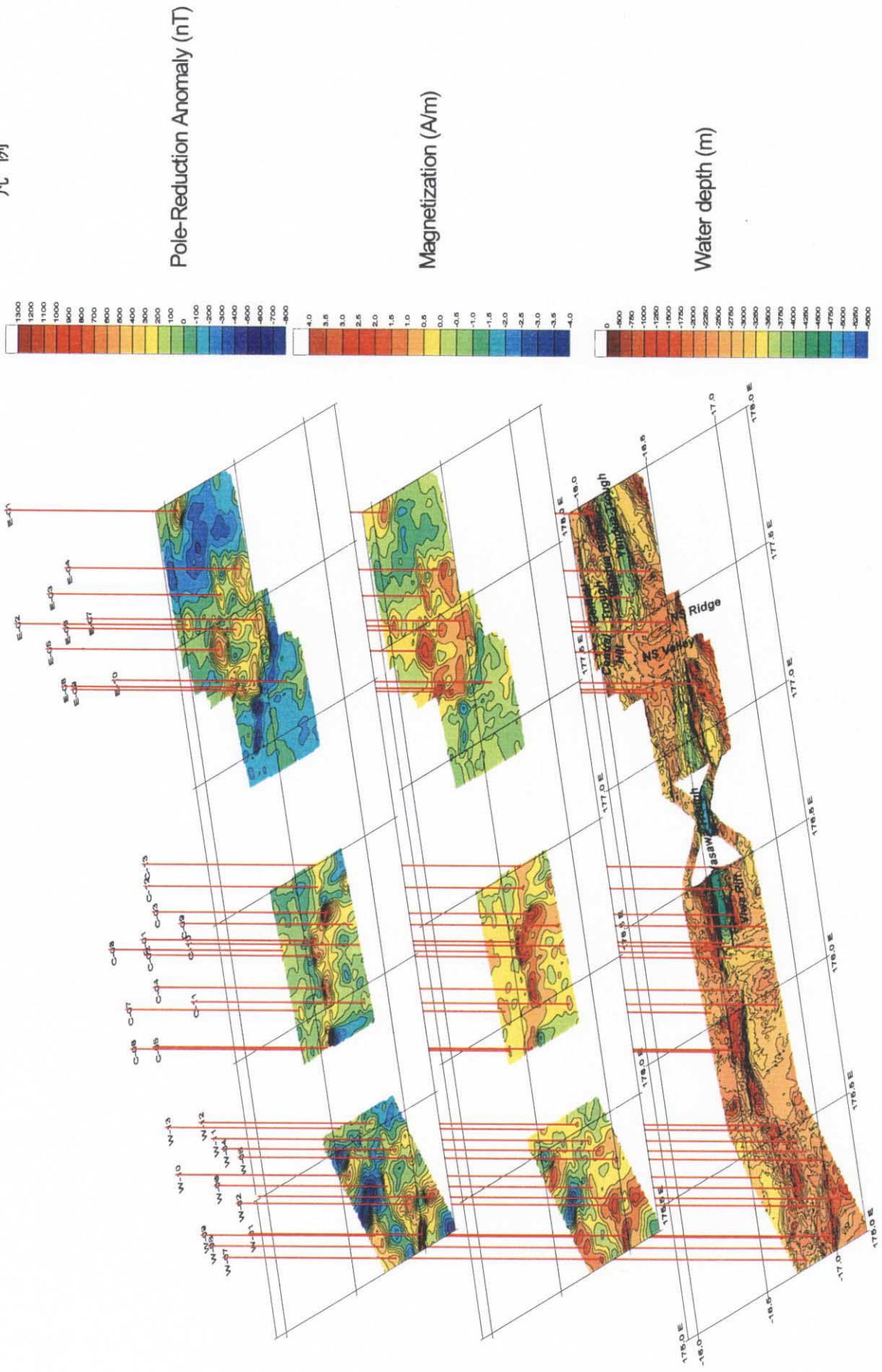


图 4-3-4 极磁气异常·磁化强度分布·海底地形图

向と斜交する南北系 (W03) 及び WNW-ESE 系 W07、W08、W09、W10) の正の極磁気異常が認められる。

なお、当海域では、正の極磁気異常が地形高所に分布し、地形との相関が認められる。

4-3-4 磁化強度分布

極磁気異常図を用いて磁化強度分布解析を行った。逆解析では、海底下に存在する磁性体の分布を無数の角柱の集合体から構成される 3 次元モデルで近似し、それぞれ各角柱の磁化強度を逆解析法で求めた。

磁化強度分布解析では、海底地形を利用し、地下を一定間隔の角柱 (上面は海底標高で固定) で区分した 3 次元地形モデルを考え、次に、任意の計算格子点を中心とする計算領域内の角柱による極磁気値の総和を計算格子点値とした。この計算値を極磁気異常データと比較して、極磁気異常値と計算値がほぼ等しくなるまで繰り返し計算を行ない、全角柱の磁化強度を求めて磁化強度分布図とした。

ここで、角柱の底面深度はキュリー点等温面深度 20 km に設定し、キュリー点等温面の影響を除去した。

上記手法により求められた磁化強度分布図を図 4-3-5 に示す。同図は地形モデルを構成する各角柱の磁化強度を変化させていることから、地下浅部の磁化強度に重みがかかった分布を示すことに留意する必要がある。大局的な傾向は、

- ①本海域の磁化強度は $-3.1 \text{ A/m} \sim 3.1 \text{ A/m}$ の範囲にあり、磁化強度の変化が比較的大きい海域である。
- ②3海域中、西部が磁化強度の変化が最も大きく、東に向かうほど変化が小さくなる傾向がある。また、同様に、磁化強度は西部ほど大きく、東部に向かって小さくなる傾向が認められる。
- ③東部海域から中部海域の Yasawa Trough 西端にかけての海域での磁化強度分布は、海底地形の大きな方向性とは一致せず、小規模な ridge、海山の方向と一致しているのが特徴的である。また、正磁化強度異常がいずれの海域でも大規模な trough の西端の地形凹部に位置している。
- ④中部海域西端から西部海域にかけての海域では、正の磁化強度分布ゾーンが海底地形の地形高所に一致しており、調査海域東部とは磁気構造が異なっていることを示唆している。

以下に海域毎の特徴について述べる。

・東部海域

磁化強度の変化は $-2 \sim 2 \text{ A/m}$ であり、変化の乏しい海域である。

中央部には南西方向の配列を示す正磁化強度ゾーンが分布し、北端の正磁化強度異常を除くといずれも地形高所（Central Hill、N-S Ridge）に一致している。中央正磁化強度ゾーンの東端には東西系の方向性を示す正磁化強度異常が分布し、海底地形の東西方向の地形高所と一致している。一方、北端の正磁化強度異常は Central Trough の西端の地形凹部に位置している。

この他に、北東端には Yadua Ridge の東端の地形高所に正磁化強度異常が見られるが、Yadua Ridge が東西方向に走っているのに対し、正磁化強度異常は斜交する北西方向に延びている。

東部海域の東側（Central Trough～Yadua Ridge～Yadua Trough）及び西側（NS Valley～Yasawa Trough）に広く分布する負磁化強度ゾーンは -2 A/m 以上であり、これらの負の磁化強度分布域全体が逆帯磁しているのではなく、磁化がほとんどないか極めて弱いことを反映していると考えられる。

・中部海域

3海域の中ではほぼ中間の磁化強度の変化を示し、 $-1.6 \sim 3.1\text{ A/m}$ の範囲にある。正磁化強度異常の配列は主に東西方向が卓越しており、南方では南北方向に変化している。

中央の Yasawa Trough 西端に位置する2個の正磁化強度異常を除き、他の正磁化強度異常群（Viwa Rift 付近及び西端）は地形高所に位置しており、磁化強度と地形高所との相関が認められる。

負の磁化強度ゾーンの範囲は3海域中最も狭く、東部海域と同様に、負磁化強度分布域全体が逆帯磁ではなく、磁化がほとんどないか極めて弱いことを反映していると考えられる。

・西部海域

3海域中、磁化強度の変化が最も大きい海域であり、 $-3.1 \sim 2.8\text{ A/m}$ の範囲にある。西部海域の磁化強度異常群の配列は北東—南西方向が卓越し、さらに、この方向と斜交する南北方向及び北西—南東方向の正磁化強度異常群が分布している。

西部では、正の極磁気異常群が地形高所に分布し、3海域中、地形との相関が最も良い海域である。

西部海域の中央北部には -3.1 A/m と大きな負の磁化強度が分布しているが、これは極磁気異常計算で生じた負の極磁気異常に起因するものと考えられ、この付近が逆帯磁しているのではなく、他の負の磁化強度分布域と同様に、磁化がほとんどないか極めて弱いことを反映していると考えられる。

凡例

Magnetization
(A/m)

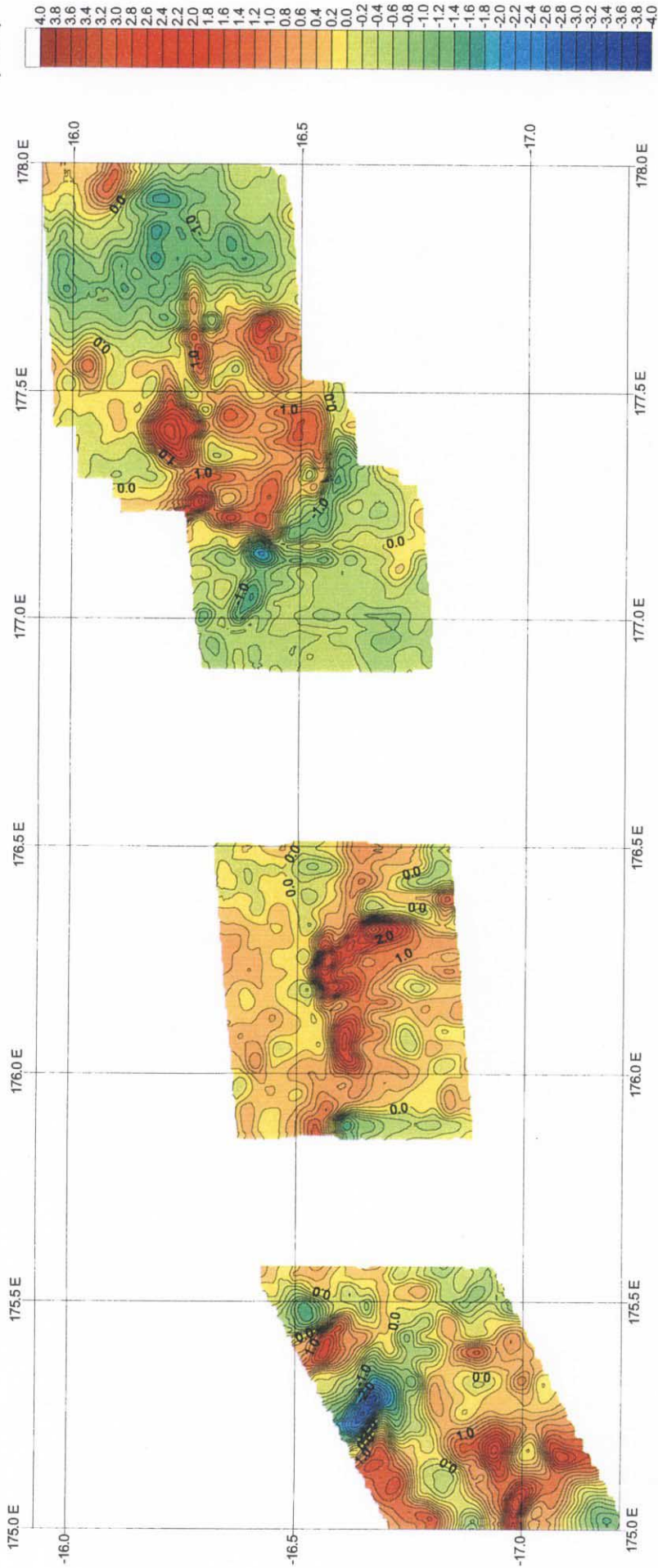


图 4-3-5 磁化强度分布图

4-3-5 磁気構造図

図 4-3-6 に示される磁気構造図は、極磁気異常図（図 4-3-2）および磁化強度分布図（図 4-3-5）から推定される次の構造を表示したものである。

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| ① 浅部に露出・潜在する強磁性体 | 正帯磁の強磁性体がほぼ海底面付近に露出または潜在する範囲。 |
| ② 磁気リニアメント | 連続する正極磁気異常を結んだ線。 |
| ③ 極めて磁化の弱いゾーン | 磁化が全くないか、極めて磁化が弱い範囲。 |

図 4-3-6 における磁気構造の特徴は以下のとおりである。

- ① 本調査海域内には、現在のところ、縞状模様は認められない。
- ② 逆帯磁を示唆するような磁気異常は得られていない。
- ③ 東部海域では、強磁性岩体は南北方向の配列が優勢であるが、中央部～西部海域では東西～北東－南西方向の配列が卓越している。
- ④ 調査海域の西部と東部では強磁性岩体の分布と地形高所との相関がまったく異なっており、西部では rift、ridge 等の地形高所に強磁性岩体が分布し、地形との相関が最もよく認められる。一方、東部では Central Hill、N-S Ridge、Viwa Rift 等の小規模な地形高所に分布する強磁性岩体を除いて、強磁性岩体の分布と地形高所との相関が小さい。

凡例
Magnetization
(A/m)

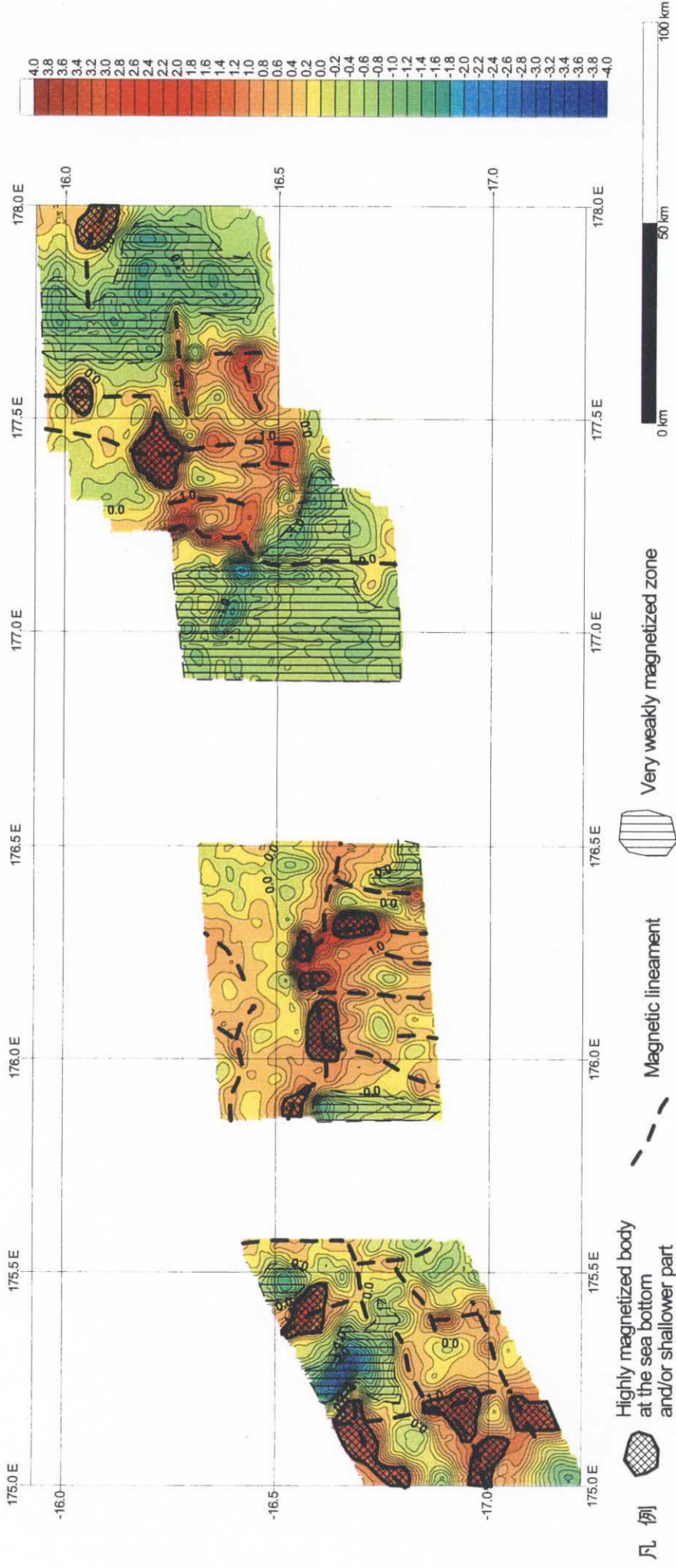


图 4—3—6 磁气构造图